



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



イワン・クパーラ in 高尾山

安部 花子

7月13日、高尾山・日影沢キャンプ場でのイワン・クパーラに参加した安部と申します。2年前に初めてこの地でイワン・クパーラを開催した際に参加者から大変好評だったこのロケーション、昨年は抽選に外れて使用許可が下りずに悔しい思いをしましたが、今年は念願叶って当選! しかも開催当日の3日前の豪雨による打ち水効果か、この週末は先週末までの酷暑が嘘だったような涼しい一日でした。日影沢という名前の通り、もともと木陰の多い涼しい土地ではありますが、雨に洗われた清らかな空気が、木々の間を爽やかに通り抜けていきます。

参加者25人のうち、2割弱は外国人。初参加の方も多くいらして、昨年とはまた異なる雰囲気イワン・クパーラを満喫できました。特に子どもたちの参加も目立ち、キャンプ場脇の小川でカニを見つけるのに夢中。今回もいつにも増してユルさ炸裂のイワンクパーラで、日影沢に到着するや否や急いで着替え小川で沐浴しながら瞑想する人、気持ち良い木陰に絨毯を敷いてお昼寝をする人や祈りをする人…、各々が自由にのびのびと自然を満喫します。

さっそく毎年恒例、岩橋さんお手製の漬けダレにたっぷり漬けたお肉を刺したシャシリク(串焼き肉) バーベキューのスタート! 今回はコンロを二分割して同時に異なる食材を調理したため、バランスを見ながら串を出し入れするのに一苦労。それでもみんなで協力しながら効率よく調理することができ、炭火が燃え尽きる前にすべての食材を調理し終えることができました。初めて会った見ず知らずの人たちが、美味しいものを食べるぞ!

いう共通の目的に向かって突き進むのは実に楽しく、達成感もひとしお。主役のシャシリク以外にも、ピーズのペーストソースやナスをトマトで煮込んで作られたソース、サモワール(ロシアの湯沸かし器)から沸かしたお湯で作ったウズベク紅茶やトルココーヒー、グルジアやフランスの赤ワイン、トルコのザクロジュース、黒パンなど、普通のバーベキューではお目にかかれなようなアイテムがずらり。参加者の豊かな多様性がそのまま差し入れに反映されます。イワン・クパーラ恒例・岩橋さんお手製サウナにはもちろんヴェニチク(体をたいて血行を良くする木の枝を束ねたもの)も完備。こちらも大好評でした。

シャシリク焼きはロシアではザ・男の仕事として知られ、上手に手際よく焼けるかどうか力量の間われる大仕事ですが、なんとその大仕事を務めていたのは、数年前にはまだ小さかったロシア人参加者の男の子でした。転んで頭をぶつけて泣いていたわんぱく盛りのあの少年が、こんなに立派なシャシリク奉行に成長して…! 初参加者の比率が高く毎年雰囲気がガラッと変わるこのイワン・クパーラですが、こういった再会もまた嬉しい醍醐味だなあとしみじみ感じました。こんな気持ちになれるのも、誰にでも開かれた参加しやすいイベントとして、毎年変わらず開催されているからこそ。その素晴らしいイベントに自分も微力ながら協力させてもらっていることを、改めて嬉しく感じました。最後にみんなで輪になり、焚火に見立てて中央に置いたコンロの火を飛び越えてのフィナーレ。来年の開催も楽しみにしています。

.....
先日は「イワン・クパーラ祭」へのご案内、そして当日のお心のこもったおもてなしをいただき、誠にありがとうございました。スタッフの皆様には、暑い中でのご準備や運営、本当にお疲れ様でございました。

7月13日、高尾山・日影沢キャンプ場という自然豊かな場所で、貴重な伝統行事に夫婦で参加させていただき、大変思い出深い一日となりました。日本ではなかなか体験することのできないロシアの夏至祭を、実際に目の前で体感できたことは、私たちにとつてまさに特別な機会でした。

川での清めの儀式、焚き火を囲んでの歌や踊り、そして参加者の皆様との交流——いずれも新鮮で、異文化の豊かさに触れることができ、有意義な時間となりました。特に「火」と「水」をテーマとした儀式には神聖さがあり、自然と人間との深いつながりをあらためて感じることができました。また、普段の生活ではなかなか出会うことのない、異なる分野でご活躍の皆様とお話をするのもでき、新鮮な気づきと刺激をいただきました。

さらに、当日の素敵なお写真までお送りいただき、ありがとうございました。おかげさまで祭の余韻が鮮やかによみがえり、夫婦で思い出話に花を咲かせております。主人も「とても楽しく、貴重な体験だった」と喜んでおりました。今後もこのような素晴らしい催しがありましたら、ぜひまた参加させていただきたいと思っております。

(矢原美沙子・会員)

お知らせ

●ロシア語クラス生徒募集中!

レベル別個人、オンラインレッスンもあります。

●講演会

下斗米伸夫氏(法政大学名誉教授)

日時: 10月26日(日) 15:30~(予定)

会場: 筑波大学東京キャンパス

会費: 会員・学生1000円、一般2000円

*詳細は後日ホームページ等で。

●遊布会

日時: 2025年10月27日~28日(火) 11:00~19:00

会場: 池袋オレンジギャラリー

手作りの布製品、マトリョーシカ等展示販売

●第27回「夢広場」

日時: 11月3日(月・祝) 10:00~15:00

会場: ぽっぽ町田野外広場

ボランティア国際交流団体による踊りや演奏、展示販売など

●日帰りバス旅行

日時: 10月25日(土)

費用: 11000円

銚子、犬吠埼方面へ *原則会員、関係者のみとなります。



書道講習会の実施

千葉 麻里

7月5日(土)午前中、田町「リーブラ」の学習室で書道講習会を実施しました。夏休みに入り受講者は7名と多くはありませんでした。が、昨年も参加したメンバーも含まれ、その後、筆を購入したという熱心な方もいらっしゃいました。

講師は昨年と同じ現代書道研究所理事の武井幸一先生。乃木坂の国立新美術館で大規模に行われる展覧会に毎年出品している常連です。いつも穏やかな教え方で、一人ひとり手取り足取り指導されます。

最初に縦と横の線の練習から始め、留め、はねなどの基礎などへ進み、簡単な漢字から自分の書きたい文字まで。集中して静かになった部屋で、たくさん用意されたお手本の中から選んだり、リクエストしてお手本を書いてもらったりします。東京、港区のような住所を表す文字、愛、家族、幸福、安心など好きな言葉を希望する人もいました。

書き順を示すとその通りに書いて、「やっぱり、この方が書きやすい」と納得する方も。日本の学校にも通っているという男の子は次々に書き進んで、読める字があると喜んで母



親に説明していました。

武井先生から時折、書道展のチケットをいただくので、日本語の授業で配ることがあります。書道は絵のように鑑賞できることもあり、関心も高いのです。

文化交流団でペルミを訪問したときに、日本語がわからないのにどれも完璧に近い漢字を墨で鮮やかに書く男性がい

たのには驚きました。そのとき同行した清水先生も舌を巻くレベルでした。ペテルブルグで少年が縫った振袖を見せてもらったときも同様ですが、ロシアには信じられないような才能の持ち主に会うことがしばしばあります。それだけ日本の伝統文化への関心が高く、愛好家が多いことも要因でしょう。

武井先生の人柄はロシアの方々にも人気があり、目を見ると先生の善良さが伝わってくる、ということです。先生も交流団に参加してみたいとのことでした。またロシアで新たな才能を発見できるか、今後の旅行が楽しみです。

(副会長)

ハモーヴニキ

畔上 明

私にとって最初に作家レフ・トルストイと出会ったのは、小学校2年のころ「イワンの馬鹿」を読んだとき、争いごとが嫌いだっただ自分の中で腑に落ちる思いがしたものでした。民話調のユーモラスな語りに惹きこまれ、悪魔たちからの誘惑には全く意に介さぬイワンの非暴力の精神に、子供ながらに勇気づけられたのです。

モスクワに移り住んだ我が子たちに向けてトルストイが「イワンの馬鹿」を書いたのは1885年秋のこと、70年代後半から精神的危機が襲い80年代に入って自身の信仰心の中で教会を否定する傾向が強まり、また81年のドストエフスキーの死、83年のツルゲーネフの死に衝撃を受けた時期でもあります。

田舎暮らしをしていたトルストイ一家が、18歳の長男セルゲイの大学入学のため、そして17歳の長女タチアーナ、15歳イリヤ、12歳レフ、10歳マリアらの教育環境も考えて、モスクワのデーネジヌイ横丁に居を構えたのが1881年9月のことでした。

翌82年10月モスクワ南西部ハモーヴニキ地区の邸宅を購入、1901年までの20年近くヤースナヤ・ポリャーナとハモーヴニキの間を行ったり来たりする生活となったのです。

そこは現在モスクワのトルストイ邸博物館として公開されていて、私もモスクワ訪問中トルストイに思いを寄せ時間が許せばハモーヴニキに足を運んだものでした。

庭園にはリンゴやサクラナボ、ブラムなどの果樹林、馬小屋、出版所となった別棟、木造二階建ての家の中に入れば家族団欒を物語る食卓、子供部屋の木馬や人形、学習帖、踊り場にはお盆を持った熊、客間、ピアノ、書斎、自転車などから、毎冬を越し春を迎えたモスクワでの生活を偲ぶことが出来るのです。



当時6歳であった六男アンドレイ、3歳の七男ミハイルはモスクワで成人を迎えます。作家の娘や息子、親族、友人らの回想録等を読めば、少々厳つく見えるトルストイの写真や肖像画から受ける印象とは違った人間性が見えてきます。

例えば、次男イリヤ(1866-1933)の「トルストイの思い出」(青木明子訳)〔群像社〕の中には、

「ときどき父と一緒にだとも楽しかった」

「父はほとんど私たちを叱らなかったけど、私たちの目を見て考えていることをすべて理解したので、恐ろしかった」

「母には嘘をつくことができたが、父にはできなかった。結局すぐばれてしまうからだ。父には誰も決して嘘をつかなかった」

「どの話しも新鮮で面白くて、愉快的な活気のある時間が過ぎて行く」

「父が私を愛していたこと、私と父がある時期お互いにとても身近な存在であったことを私は知っている。それにもかかわらず、父は自分の愛情を決してあけっぴろげの直接的な表現で示したことはなかったし、常に表現することを恥じてでもいるかのようだった」

「父の性格には - おそらく母親を知らずに育ったためか、あるいは生まれつきだったのか - はっきりとした、一見奇妙に見える特徴があった。やさしさを表に出すことが不得手だったのだ。私は『誠実さ』ではなく『やさしさ』のことを言っているのだ。誠実さなら父は十分に備えていた」

こうした子供の立場からの回想によってもトルストイの温和で寛容な姿が浮かび上がってくるようです。

天高く猫?肥ゆる秋

大原 翔

酷暑の日々も去り、ようやく秋の気配が感じられるようになった。この季節にロシアでよく耳にする表現に「黄金の秋」がある。広大な平原の森林や都市の並木道の木々が、一斉に黄や赤に色づき、文字通り黄金色に輝く秋の到来を指す言葉だ。

もちろん、ロシアの黄金の秋は実りの季節でもある。日本でいう「天高く馬肥ゆる秋」にあたる。実りの豊かさを表すことわざはロシアにもあり、最近ロシア人の友人から

「Осенью и у кошки пир (秋には猫にも宴がある)」という言葉が教えられた。豊饒の秋には、猫さえも食べ物に困らない、という意味だろう。

サンクト・ペテルブルクの中心街ネフスキー通りを歩くと、必ず目に入る建物がある。革命前の20世紀初頭に建てられた老舗高級食料品店エリセーエフだ。合理性と機能性を追求した当時流行のモダン様式で建てられ、大きなステンドグラスを備えたその建物は、今もネフスキー通りの象徴である。外壁の高い位置には、一匹の猫のブロンズ像が通りを見下ろして鎮座している。遊歩道を挟んだ反対側にも、対をなすようにもう一匹の猫が置かれており、それぞれエリセイとワシリヤと名づけられている。

この二匹の像が設置されたのは2000年頃のこと、今では

知る人ぞ知る観光名所となっている。その背景には、独ソ戦での出来事がある。1941年6月、ドイツ軍がソ連に侵攻し、主要目標の一つであったレニングラード(現サンクト・ペテルブルク)は包囲され、長期にわたり兵糧攻めにさらされた。極度の寒さと飢餓、病が市民を苦しめる中、残されたわずかな食料をネズミから守るため、ヤロスラブリ州などから特別列車で「ネズミ捕り専用の猫」が密かに送り込まれたという。この猫たちのおかげで食料が守られたことを記憶し、市民の感謝を示すためにブロンズ像が建立されたのである。老舗食料品店のそばに置かれたのも、偶然ではないだろう。

市内のエルミタージュ美術館にも、猫の姿を見ることがができる。展示されていない膨大な収蔵品を守るため、倉庫では今も多数の猫が飼われ、ネズミから芸術品を守る「番人」として活躍しているのだ。

黄金の秋の澄んだ空の下、ロシアの旧都の街並みを、満腹の猫たちが屋根伝いに悠々と歩いていく——そんな光景が自然と目に浮かんでくる。

参考：高級食料品エリセーエフの店

<https://www.kupetzeliseevs.ru/en/>

.....
* 先月号で大原翔様のお名前が原翔となっていました。お詫びして訂正いたします。(編集部)

国際放送史研究の戯言No34

モスクワの犬猫

島田 顕

モスクワの街中を歩くと野良犬、野良猫に出くわす。道で寝そべっている奴もいれば、歩き回ってエサを探して求めているものもいる。やはり春夏秋冬に出くわす機会が多いのだが、なぜか厳寒の冬にもいるのである。雪の中、奴らはうろついているのである。その理由は、地下鉄の中、改札口やホームにすることができるからである。地下鉄などの地下道は外気よりも比較的暖かく、生活することができる。それよりも地下鉄のホームにすることが許されているのが不思議である。日本の地下鉄だったら、追い出されるだろうが、モスクワは犬猫に寛容なのだ。だから犬猫を連れて地下鉄や電車に乗ることもOKである。

飼い犬、飼い猫も多い。モスクワの住宅の大部分は集合住宅なのに。犬を飼っている家庭は多いのだ。まあそれなりにしつけはされているのだが、ドアを開けると大声で吠えられることがよくある。近所迷惑にならないのかなあと思うのだが、多くの家庭で飼われているので、お互い様なのだろう。

かつては空港にも野良犬がいた。モスクワにはシェレメチエヴォ、プスコヴォ、ドモジェドヴォという3つの空港がある。シェレメチエヴォは国際線用でプスコヴォ、ドモジェドヴォの2つは国内線専用に使われていた。やがて国内線専用だった二つの空港も国際線の旅客機が乗り入れるようになり、ドモジェドヴォ空港にはロシアの対ウクライナ侵攻の前にはJAL機が立ち寄っていた。国際線の旅客機が乗り入れるようになる以前、私が放送局に就職した翌年の1997年の冬に、一度だけドモジェドヴォ空港を訪れたことがある。日本からのお客さんをウズベキスタンの首都タシュケントに送り出す仕事。シェレメチエヴォ空港でお客さんを出迎えて、タ

クシーでモスクワ都心のホテルに泊まらせ、翌日にタクシーでドモジェドヴォ空港に向かい、チェックインカウンターまで見送るためであった。

その時はまだ国際線はわずかで、ほとんど国内線専用であったので、空港内も薄暗く、汚く、くさかった。旅行者の待機スペースがあったのだが、そこで寝泊りも許されていたようだ。何日も寝泊りするので、体臭が充満していたのである。野良犬たちはその場所にいた。空港に寝泊りする旅行者からご飯を分けてもらっていたのだ。空港の汚さやくささにも驚いたが、野良犬が空港で生活していることには度肝を抜かされた。

モスクワには物乞いも多いのだが、犬を連れている物乞いも結構いた。犬の餌代のために小銭をもらっているのだ。その犬はと見ると、シェパードなどの大型犬が多かった。物乞いするくらいひもじいなら、犬を飼わなければいいのと思うのだが、大型犬を捨ててしまっただけで野犬化したらと思うと、捨てないで飼い続けてくれという気持ちにもなった。

犬猫の避妊はしないのだろうか。モスクワで犬猫病院というのを見たことがない。だからなのか、ヴェーデーヌハーという大きな公園で、沢山の人が子犬、子猫を売っているのを見かけたことがある。入口近くに列をなして、入場者に子犬たち、子猫たちを抱いて見せて、可愛さをアピールしているのだ。その場で私にできることといえば、子犬たち、子猫たちが良い人にもらわれていくことを心から願いながら、その場から素早く立ち去ることのみだった。

キルギス旅行記

前田 玲子

キルギスの民俗楽器コムズを習っているかたがたの仲間入りをさせていただきキルギス8日間の旅をしてきました。首都ビシュケクにつくやそのワイルドな自然、街のどこからも見える氷河の天山山脈、そこから流れ来る豊かな水。工場とかビルとか一切なくのどかな街、穏やかな人々。

次の日からコムズの制作工房へ、工房は、御夫婦で制作しておられ、粘土でオカリナのような笛を作らせてくださり、ご夫婦でコムズで演奏したり押しかけた私たち17人に素晴らしい御馳走を用意してくださいました。昨年までロシアからの兵役逃れの人たちで人口が二倍に増えたけれど、今年になり殆ど中国やアメリカ東南アジアに出ていってしまったと聞きました。氷河からの水も、減ってきて雨もふらず、木や草は埃だらけ。側溝も干からびているとか、不安の声も聞こえてきました。

でも素晴らしい旅は、これからです。キルギスには二つの大きな湖があり海拔2500メートルにイシクル湖、琵琶湖の三倍の海のように大きい湖、そこからさらに6時間かけて海拔3550メートルのソンクル湖へとガタガタ山道をトイレ休憩もなく高山病と戦いながら。でもタイヤが、パンクしてやっと外にでられた時間がありました。運転手さん一人でタイヤの交換を辺りが暗くなる中でしてくれました。夕方、今日泊まるユルタが見えてきてほっとしました。ユルタについた時は薄暗くなって10度以下になっており、肌をジリジリ焼いていた太陽が沈んでしまうと冷え冷えと、星が本当におりてく

るようでした。そうなるこの星空を何時までも見ていたくてユルタに入れなくなりました。

次の日は乗馬の予定でしたが予約ができてなくて、乗る気になかった方達も乗る気になっていたのにインストラクターもつかず、皆でソロソロと湖を巡りました。それでもその雄大さと木のない山脈の折り重なりの見事さ、忘れられない光景でした。

ソンクル湖からイシクル湖への下りもまた一日がかりでした。夏の終わりで、牛や馬、羊などを山から下ろす群れと出合うごとに車が通れる幅を空けられるところまで、一緒に行かなければならず時間がかかりました。でも動物たちの中には生まれてまもないような羊や子馬がいて、可愛いこと限りなく感激でした。下りは、高山病になる人もなく皆で感激しあいました。

翌日は音楽学校を見学しました。最近キルギスの公立学校は、キルギス語で授業をする学校とロシア語で授業する学校に別れているようで、将来のため子どもをロシア語で行う学校に行かせる親が多く、キルギス語の学校は生徒が少なく成り立たなくなっているそうです。因みに音楽学校は私立の学校で、余裕のある家庭の子どもが、三才からロシアなど外国の大学に入るまで公立学校のほかに通うそうです。そのせいか子どもの姿を滞在中殆ど見ませんでした。帰国は、また仁川経由で、7時間の空港滞在で帰りました。

ロシアと熊

キタヤマ 忍

今年は熊のニュースが無い日がない。ロシアは熊と仲良く暮らしているけれど、どう接しているのかしら？と知人が言う。熊と少女が寄り添う写真や白熊が家のそばを歩く映像など、ロシア＝熊、象徴を超えておとぎ話が現実の国という強烈なイメージがあるのだ。

ロシアでも古来は神として、そして衣食薬として畏怖と敬意を持って大切にしてきた熊。10以上の都市が市章に熊を描いており、熊の伝説や言い伝えが残る村や地域は数知れず。だが、ロシアで熊のトラブルがないかというと実際には違う。ロシアも日本も北米でも大きく力強い野生との共存には同じように試行錯誤している。

ロシアにはカムチャツカグマ、ユーラシアグマ、ヒグマが生息している。これらの熊も北米のグリズリーも実はヒグマで亜種として区別される。中でも北海道のヒグマとカムチャツカグマはとても近い親戚だ。かつてヨーロッパ全域からアジアと広く生息していたヒグマは狩猟を始めとする様々な要因で一部地域では絶滅。ロシアでも減少していたがソ連崩壊後の国をあげての保護活動により3倍近くにまで増加したと言われ、世界最大のヒグマの生息地を誇る。

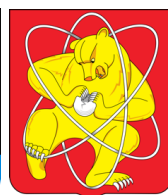
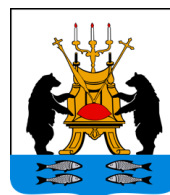
ヒグマは森や山に住んでいるイメージがあるが、湿地帯にもいるし、肉食ではなく草食に近い雑食だ。フルーツやナッツが大好きで甘党なのだ。エネルギーが必要ならば肉や魚介もいただく。個々それぞれのテリトリーも必要だ。広い国土と豊かな自然があっても、人と接することなく条件の整った

環境には限界がある。フィンランドに近い北極圏のアルハンゲリリスク州では年間に約100件のヒグマ対応の要請があるそうだ。長年の研究によって同じ州内でも習性に大きな差がある事がわかっており、熊が人の多いエリアに近づかないような公園整備など国内各地域に合わせた対応が実践されている。

ここ最近日本で話題の「アーバン・ベア」も大きな課題だ。餌をあげない、子熊に触らないなど、問題の熊を人間が生み出さないよう注意喚起されている。もし熊に出会ったら？おおそ対処方法は日本と同じ。背を向けず、騒がず走らず。静かに自信を持って、自分が競争相手ではないけれど危険だぞ、と明確に言葉で伝えるのも大切な。

ただし近づいてきたら熊スプレーを。

(ビデオグラファー)



熊たちが愛らしい市章

